

「陳述」をめぐって

鎌田良二

陳述についての見解は種々さまざまであり、既に多くの論文によって紹介され批判されつつ最近ようやくその姿が明らかになって来たのであるが、なお、それら先報諸賢の見解を基として、ここにそれをめぐる問題として考えの一端を述べてみたい。

「陳述」に入る前に文における「統覚作用(統合作用)」について見よう。

(1) 一の思想には必ず一の統覚作用存すべきなり。今これを名づけて統覚作用という。……………この統覚作用によりて統合せられたるもの即ち文なりとす。
—山田孝雄博士(註一)

(2) 文の意識は、……………統一された思想の表現であるということが出来る。
—時枝誠記博士(註二)

(3) 統一作用とは、……………思想成立の最も根本的な作用である……………思想である以上は必ず統一作用が予想されなければならない。

……………一つのまとまった文は一つの纏った思想の表現であつて、纏らない思想(それは実は思想ではなくて表象の堆積か、或は思想以前の混沌に過ぎない)の表現は文とはなり得ない。

—三尻砂氏(註三)

以上(1)(2)(3)は何れも思想成立条件として統一作用をみている。統一

作用の働いていないものは(3)でいうように表象の堆積か混沌であつて思想とは言えないのである。

(4) 現実的な我々の思想は、常に、意識に現れる客体的な表象或は概念と同時に、それらに対する判断、感情、欲求、願望等の如き自我の活動を伴うものであつて、両者合体して始めて思想となるのである。
—時枝博士(註四)

ここで統一作用とは言語主体において客体的表象に或る統一を与えたとき、主客合一した作用を言うのであると考えられる。

(2) では統一作用を文成立の条件としておられるが、文と思想との関係はどうか。三尻砂氏は「文と思想との相違点は、ただ外に表現されているかいないか、というだけのものではない。思想は決して心の中にある文ではない。心の中にあつて未だ外に表現されなくても、文の形をとつていれば、それは思想ではなくて文である。思想は更にその文の背後にある。そしてその思想をして思想たらしむる絶対条件こそ統一作用である。」(註五)と言つておられる。これは心理的な説明になるが、文法学においては文を問題にすればよいのであつて思想は問題外としてよいか、どうかである。文と思想との関係を明らかにしておかねば、外にあらわれたものが文であり、心の中にあつて未だ外に

あらわれないものは文法では全く無視してよいかどうか、この辺に時枝博士の零記号の問題がからんでくるのではないだろうか。

さて、統覚作用と陳述作用との関係はどうだろう。

時枝博士が

山田氏は、思想の統覚作用を、思想の内容である表象或は概念の外に置き、これらを統合する作用と見られたのであって、氏の所謂陳述の作用とは又この統覚作用と同一の事柄と考えなくてはならない。(註六)

と述べられたのに対して、

佐藤高代治氏は

(5)統覚作用というのは……文において表現された、思想を統一する作用である。陳述作用は判断作用における主位概念と賓位概念とを結合する繫辭に相当する文法的機能をさす。それは二元的表現、山田先生のいわれる述体句にのみい得ることである。従つて陳述作用は用言に限ることであるに反して、統覚作用はすべての言語表現に通ずるはたらきである。必ずしも二元的表現に限らず、一元的表現である喚体句についてもい得ることであり、述体句にあつては意識の統一が述格に寓せられているに對して、一元的表現においては意識の統一、すなわち統覚作用が呼格たる体言に示されるといっておられるのである。(註七)

と山田博士の統覚作用について説明しておられる。

文成立の条件として統覚作用は必要であるが、陳述作用は述体句のみにあつて、喚体句には無いのである。つまり陳述作用は文成立のた

めの必要条件ではないのである。

が、陳述を大野晋氏も言われるように(註八)「論理学でいう「判断」の概念よりも少し広いものとする、

何かの事柄に対して言語主体の志向作用が働き、それを統覚し思想の形をとり、それを文として発表するとき、何らかの語手の判断、即ち、肯定とか、否定とか、そのほか、その事柄について感動とか、疑問とかの気が働くものであり、それが働いたものであると思う。それを陳述作用という、喚体句であっても陳述は表現はされていないが、陳述作用そのものは働いていると考えるべきではないか。

陳述について

(6)文というものは、何か事柄があつて、その事柄について、語手が判断してそれを表わしたり、感動をあらわしたり、疑問や否定の心をあらわしたりするものだと言えよう……この語手の判断や、感動や、疑問などをひとまとめにして、陳述という名をつけましよう。
—大野晋氏(註九)

(7)事柄の表現に更にそれに関する話し手の「こうだ」とか「こうでない」とかいう判断、あるいは問いや命令や禁止や要求や願いや感動の気持の表現(これらを一括して陳述と呼んでおきます)が加わつて、それだけで一応閉じられているものが文である。
—坂倉篤義氏(註一〇)

(8)終助詞によつて代表される……言語者をめあての主體的なはたらきかけを、内容めあての叙述と區別して「陳述」と呼ぼう。
—渡辺美氏(註一一)

(9)陳述の語を以て、全文を統括し、完結する語手のいとなみ

の称とする。

— 芳賀綾氏 (註一二)

ここで(1)(3)によって統一作用は思想成立のための必要条件であつて、心理的な働きであり、心の内にあるものであり、陳述作用は文成立のための必要条件であつて、それは普通には言語の形式をとるものである。

即ち、陳述は(6)(7)(8)によってみられるように、事柄に対する言語主体の態度を言ひあらわしたものである。

例えば、ある事柄に対して、他人はどう思っているかは別として、話手がそれを否定するという態度にあることを聞手に示す、というようなものである。

このように陳述をみた場合、

「彼は行く」というとき、統一作用が働いているのであるが、言語主体は「彼は行く」という事柄を肯定し断定しているのである。特に肯定し断定していることを示す語「だ」をつける場合もあるが、肯定し断定しているのだから、事柄をそのまま出しておいてもよいのである。

「言いたければ「彼は行く」のである」としてもよい。また、「彼は行く—だ」と方言にあるような形にもなるところである。

とにかく「彼は行く」という事柄に対しての言語主体の態度は「だ」という肯定し断定したのである。こういう場合にその断定辞は略されるので、時枝博士の零記号があり、それに陳述があると認められるのである。言語主体の態度は「行く」という動詞には入っていない。

特に推量という態度をとるときには「彼は行く—らしい」となり、

否定するという態度をとるとき「彼は行かない」となるのである。話手が「彼は行く」という事柄に対しての態度を聞手に示したものである。統一作用は「彼」と「行く」ということを統一しているのである。

そして、推量ということは、話手は「彼は行く」という事柄全体に働いているのである。即ち、「彼は……」という言葉を発するその直前から、次に述べる事柄を推量するということはわかっている、だからこれを入子型構造で示せば次のようになる。

彼は行く

であるが、更に、推量では、

彼は行く—らしい

である。「らしい」という推量は、「彼は行く」という事柄の裏全体に流れているのである。

同様に、否定の場合は

彼は行かない

である。「ない」と

いう否定の語は文の最後についているが、否定するという話手の態度ははじめからきまつているのである。それが日本語では否定の辞は文末に来るという文法上の約束であるだけのことである。

それが肯定の場合は、その辞を言わなくてもよいということになっているだけである。

彼は行く (だ)

という形になるから、これは

彼は行く
(肯定)

となる、即ち、零記号は、「彼は行く」という事柄の裏全体に流れているのである。

次に、陳述は必ず文末辭にあるか、どうか、

陳述を言語主体の態度の表現とみると、例えば、「過ぎにけらしな」などのとき、

過ぎに けらし
な
(詠嘆)

のとき、即ち、「な」という詠嘆が「過ぎにけらし」全体を包んでその裏に流れているとき、と、

過ぎに けらし
な

のように「けらし」が全体に流れていて、「な」は後につけても、つけなくてもよいというとき、即ち、言語主体の態度は「けらし」であって、それが「な」よりもはるかに強い、主なる態度であるときがある。

同じようにして「雨ですよ」の場合も、「よ」と念をおすことを強く出す場合と、「です」で言い切つてよいところを一言い切つてよい

というのは意味の上からでなく話手の態度として「よ」と後につけた場合とがある。主なる方は「です」である場合である。

こうして陳述をみると、**「火事ノ」とか「犬ノ」と叫ぶ一語文は、ごく特殊な場合でこれは「火事だ」「犬だ」と叫ぶ、「だ」という断定辭が出るべきときに声となって出なかった、とか、出さなかっただけである。何故、出さなかったか、出さなくてもわかるからである。**

言語主体の態度が、肯定し、否定しているときは「彼は行く」と同じように、断定辭はつけなくてもよいのである。態度そのものは裏全体に流れているのである。

先に、言語主体が、事柄に対して、口を開くその直前から、その事柄についての態度、即ち、肯定するのか、否定するのか、或は、その事柄が疑問なのか、それに感動しているのかはさまっていると云つたが、

次のような場合はどうか、

「日程を変え、明日出発する」
では、これを入子型で示せば、

日程を 変え、 明日 出発する

となる。この例文は、時枝博士「日本文法 口語篇」(二四八頁)のものであるが、「日程を変え」の下にある零記号と、「出発する」の下にある零記号とは、一見、同じような形に見える。

が、右の文の三つの零記号にそれぞれ適当な語を入れて「日程を変

えて、明日は出発するらしい」としたならばどうか、

まず、「て」という接続助詞について考えるに、「日程を変えた、そして」という意味にとると、「て」の働きは「そして」という接続詞と同じ働きをしている。その場合、先のようにして示せば、

日程を変えた
(完了) として

という形になる。するとこれは

日程を変えた
(客記号) て

となつて、これは客記号の陳述で、「て」は、接続詞と同じ働きで、ただ、連結の役を果しているのであって、「て」自身に陳述があるというのではない。

「明日は出発するらしい」の「らしい」が、どこまでかかっているか、「日程を変えた」ことも、実は、はっきりしていないで、「日程を」以下全部を推量する場合もあるが、今ここでは、「日程を変えた」ことは確かであるが、「明日は出発する」ということだけを推量する場合には

明日は出発するらしい
(推量)

となつて、「らしい」は、「明日は」以下を包むことになる。

そういう点で、接続助詞の「て」と「らしい」という推量助動詞とは働きが違ふのである。

そこで、この「らしい」と同じような形になるものが陳述の働きを

していると考えるとき、陳述は、助動詞と終助詞とにあり、格助詞、接続助詞、副助詞は、結局、連結という役目を果しているものであつて、これには陳述はないと考える。

客記号というのは、客記号それ自身が陳述の働きをしていると考えられるべきではなく、本来ならば、断定辞か、何かが入るべきところであるのが、入れる必要がないから、とか、そのときまたまたまらなかつたとか、結局、一種の省略形というふうなものであると考える。

(註一) 「日本文法学概論」 九〇一頁

(註二) 「国語学原論」 三五一頁

(註三) 「国語と国文学」 一六卷一頁六九頁

(註四) 「国語学原論」 三四六頁

(註五) 「文に於ける陳述作用とは何ぞや」(「国語と国文学」第一六卷一頁)

一六卷一頁)

(註六) 「国語学原論」 三三四頁

(註七) 「国語学概論」 一〇六頁

(註八) 「はじめて文法を教える時に」(「国語学」第五輯)

(註九) 同書

(註一〇) 「日本文法の話」 四一頁

(註一一) 「叙述と陳述―述語文節の構造」(「国語学」第一三、一

四合併号)

(註一二) 「陳述・とは何もの?」(「国語国文」第三三卷四号)